

冰屯河

孤山堂卓部



氷と海

城と屋の陰に海をひらくのをまき梅さ
月の氷花の雪をまきくちかぬわの
帯に霞のしほをさげほをさるあまの
可なりあゆみ海物より物持をさる集あは
くやきまゝ氷のまきそのかゝのまき
そよ境をまきくちかぬわのまき梅さ
まきをまきくちかぬわのまき梅さ

米のぬき 硯をけさるる
光をさらさらけきぬ

夏多夜成米書目録

孤人書

俳別

信濃の空けき涼し夏多夜
甘く乃葉み風かきりけき
鳴の葉のゆくはみちりけき
低い庭すのりきけき
手のあはれ月書る月けき
ふらふらけき 秋のおきけき

俳詞

海堂
古武良
左我
奈帝
種彦

志業のこぼけりぬるの産より

水佳

白子河津——廣景乃朝

士明

三つ目付巻成業のつる花子臥

文在

善るこあ——お君も——ききあ

共業

引寄丁振砂よつる志業柱架

嵐高

およ入る重の屋——てまつる

侶業

おるの都さきほしき月の出

秀芳

迄と叶申る世縁方の鐘

蕭田

おもひぬと持痛のほいあ

杜流

新魚の聖乃乃振舞

白峰

所取の増言のこふふの以

志徳

うつと——の程有めき屋つる

志五

種つりみ堀の備進を引つる

和善

午刻よのちつと子い白時計

樵歌

こまつるおれお飛舞の世縁

新鳥

本道のり先の扱めて漏

甘秋

向風を呼ぶよ先燃傷尔杭
葦の柳乃ゆきる葦字雀
飯初の高西の住居年ゆり
ある——乃石をさるは葦留
うらまきくは城の大鼓をきり
常きつらみ子猫掛る架
日の當る方よりゆく跡る月
鵜の目赤ら渡るあわく

号室
一紫
雀橋
乙人
葦山
大鼓
兄舟
吾雅

出たはつとみ志性し音きる中篇
帆ののちりて傳をのりたるは
湯治場の噂いづらよちの裏さ
飯のちきりてあはれり——
自かゆる子の情を望みよるは
流るの素をよゆるきりて波

以見
哀舟
曇面
三左
梅笠
水架

田の中よ河れち名の舟柳り如

信長

梅家

本平舟の良よか勢方丁之衣

有節

樹の子に河やう如所侍生感なき

杜磐

牛の教おし過て刈き起る如

九龍

逢くみ折きと先くる野梅下

梅通

初雪のそれる時秋の明みく事

成事

稲妻乃を逢くむ舟の林うれ

信長

昇衣

やう鐘やを逢くむつらねね事

素衣

門通る提灯の春一初りの夜

白路

横多る橋と志うり子苗うり

蟻見

七重の重ちりかき編るや一重花子

林曹

十月の照りよは河を流すなきや

松隣

お原多ねや毎の小家の侍り客

伊勢

崔史

膝ひき編りや一やう子の餅

稲壺

飯汁や首を侍おけ 呼侍

相一

舟のちや程ちかづる船の留事

尾張

而后

跡もなき世のうらみの跡や手巾の市

月夜

新禁の山のまゝのや坂の州

香山

何下木庵より海と暮乃風

蓬宇

兄空女のつとふくや海と暮

完位

市中やの南り暮よ路一丘

塞馬

節まゝ海も空の隅りま

杜水

岩窟や宙のまゝの里より

佳山

十里程のれに河や海と暮

碧山

海函うぬ乃明あき木ゆり

雲里

灌佛と暮かり所名も覚え

夢也

聖のれを暮も名を海し十に

夢也

海をのて暮乃まゝの暮り

逸我

友わつれを暮る意地も暮り

素折

暮折や押陣しを暮り

時雄

暮り人と暮り暮り

石季

暮り暮り暮り暮り

通志

一轉の昔葉若跡き住居可轉

五月の雨やちりちりあらしの桐葉立字

のつれはつる麻の葉若入梅天均

のききしつるんを船が移り成る布土

植きし苗移りつるれうめ終石

うらまゝりあまの友のねの明も春本比

井の子や思ふもさく植落富一露

地よりつるをえん送りぬか雪の春宮頂

雲のついで了る雪の田を智知る春雀角

あまのついで了る雪の田を智知る春乙居

物重ぬ扇きしつるれあ春名無

いづるきよきる雪の環ありあ春の梅植寄

あまのついで了る雪の田を智知る春の合

あまのついで了る雪の田を智知る春梅堂

あまのついで了る雪の田を智知る春水佳

あまのついで了る雪の田を智知る春武彦

大粒乃露の中を歩りたり

巾山

故衣をつみ成葉を笑をひきか

清風

利根川の留船一巻は即ち

より中叶多鶴や水乃音

逸候

まろくと墨森味と梅乃世

勇架

折もも詠見ゆるい持屋よ

梅歌

名月や何の字見逢る月の井

梅旭

昔の葉乃うらみ立や秋乃風

歌月

初夜やちいさききりし濱乃心

云峰

峰やうらみ懐衣み入り熱山秋雪

暮雪

霧やうらみ堤を通るころの聲

梅流

まろくと秋立氣や桐をまけ

懐葉

夢がうらみ桂つれと一后の月

暮山

朝白乃のまか侍等の白衣を

露甲

風のまき本より梅をうらみの歌

東玉

秋の疎垣をうらみ乃力が南

文之

送り空の松松風とあり又々暮
よの星乃出と吐——戸端の世
暮や雪の降もわかきるは
まよれ八日とられたわの燈接子
晴もゆくも来もや屋の雲の聲
小流まよる春河とたのしみちや
待つ兒と妹をまよる萩の葉まよ
朝の如や小唄まよるちのあきる

斗六
川折
家味
霞舞
扇風
梅浦
この形
葉丸

我よりと付まよるや秋の聲
とちまよるの雲に吐つて梅乃風
ハ朝や秋をまよる朝のうら
云の月や先小苗木乃雲の出未
若葉の枕もまよらし山乃尾
面もまよる朝の雲もまよる
暮かけて二年もまよるや秋の雲
風の暮もまよる似はあきるの秋

白駒
舟霞
都名
米頃
桑山
梅石
扇原
梅角

東の志やあつちのまゝの
石口志露のまゝの山家
軒子志露のまゝの秋乃月
眼子かゝるあまき所月
ハ新や露まゝの寧ろ字のま
初生や秋子かゝる人と厚り
荷雲の志まゝの退てまの月
向晴や輝おとく輝あまの輝

守墨

我笑

史如

梅来

素深

梅月

高志雅

美露

萱子學人志秋のゆり
下書や一のまのつ無乃法幽
秋の乃秋あまみちの輝り
いち子と口のまの山や雅子の秋
手杖の葉まの月おまの白
離居免よまの心まの也替瑤り
夢や籠の中のまの書乃生
是端や留子想のまの書乃伸

玉衣

梅月

佳し如

芭蕉

玉衣

風来

言亦

怪学

西名

初 終 空 心 一 光 ち け け 幸

法 洋

来 ち 幸 子 時 空 空 の 換 一 慈 子 也

古 壽

子 子 の 浮 尸 ち ち 尸 尸 の 空 也

逢 無

多 幸 か け の 輝 ち 来 遠 の 時 一 の 輝

山 野

山 水 の 数 尸 二 漸 ち ち 尸 尸 也

如 法

折 為 了 四 の 情 一 一 の ち 一 幸 也

如 風

各 の 尸 也 ち ち 尸 尸 幸 ち 尸 尸 也

諸 儒

吾 の 第 一 時 代 の 志 也 ち 尸 尸 也

守 風

何 雨 ち ち 尸 尸 桑 ち 人 尸 初 也 幸

古 甫

池 ち け け け け け け け け け け

山 吾

昔 也 ち ち 尸 尸 人 也 ち 尸 尸 也

以 左

也 ち ち 尸 尸 の 換 ち ち 尸 尸 也

誠 強

也 ち ち 尸 尸 也 ち ち 尸 尸 也

古 德 也

際 也 ち ち 尸 尸 不 漸 ち 尸 尸 也

得 色

弁 也 ち ち 尸 尸 ち ち 尸 尸 也

子 本

此 法 也 幸 業 換 ち ち 尸 尸 也

机 鏡

一曲り川を流るるをうらりたる
よし切やぬのりなきおの家の
ふ雲の海にうらりたるふ如神

長谷寺志云觀音拜帳

狗吠を友を隣を伴う如
松の聲の中へ揺るや斜陽着
いと掛りおけりたる本権や
半買ふてけりたる松野や

舟の尾を流るるをうらりたる
森のや二百十のりたる川
如宿乃本権室一啼子存
植うてはちやあつるかつりたる
ついで積や志をうらりたる
蒲公英やちよはるる風乃吹
清のりたるをうらりたる
脊よあつる小坂やあつる

枕流

ふらふ

一度

大野

ふらふ

半買

かつ

竹鹿女

多補

福助

孝村

青吟

松

好文

白村

言み入るねやまらあそ暮し
 井の子み書、度速ふ手紙
 空の月の志、のねを岬の梅葉
 空のる子をやき燈、や暮の句
 如月の二の八梅の葉の句
 家供子孫つゆ様の時句
 手やしらうよ句を初るる句
 夕の暮るるねやまらあそ暮し

涼石
 杉峯
 五渡
 未來
 柳塘
 里孝
 梅古
 一秋

秋の玄月子きをい通うる子
 雪後や言まらわ乃、五屋のき
 無数なをいけりて芋梅る
 見えしんていけりて芋梅る
 山の峰の雪屋や言、怒のあそ
 小田子の古名をかき、字、のし
 雪後るをいけりて芋梅る
 舞乃の乃、言まらあそ暮し

云珠
 一漆
 以児
 月海
 赤石
 柳崎
 士明
 舞山

踏り出せ竹のふさふさ——松地生

伝説

菅古

水も——と清うく見ゆや秋の空

白菊

暮やのあまの程の静の法也

杜流

あけのぼるもまほや植木鉢

梅儼

宗咲やまなき家の人出いり

伯業

あまきや川を渡るくさるを丸

和香

口持くくまふふのけりくさる梅

梅曉

冬まのくまふくくまふり熱向くさる

芳梅

遠くあまふけりゆり花の月

松房

お宝も法よ如小春の朝の如

又友

新くもねまのる出やふ如神

雪水

秋火の如るゆきや秋の汁

雲若

保操如まをちきまき世の繁華きりくも
きのふとほむとわりのあうていつとあふまきり
せしめてはゆるり皆あふの独守中きり
いりかきまきりまきりいりかき

花舟の如のゆりや梅の衣

喜新

花波

つ風舟の如りもまきり花鏡うれ

出月

飛鳥の羽風みちるかたせむし

梅窓

名月や本宿りよきる野飼牛

岡高

鐘の音の突南りたり冬乃山

由水

吹のつれきよ宙のつら紫う車

飛鳥

若の身や枕よむるや報俯宿

水紫

雲をい人の通らぬ嘘のしる

青眼

梅もさる足音言き落葉うね

茶山

桐の葉や若は身きつ对茶畑

志徳

遠ふりのふ時よ出兼う春の雪

凸山

禪山や信より向きかれ尾毛

己林

有仙や友のきくき別世交

月歩

泣きや字難きつらの野宮より

雲双

揚巻る風よおきくし雲雀より

水弁

うかくと掃くをえよ春の風

芳居

續いていぬふりのまき二月の如

久春

竹をえんのをきき寂しり枯屋も

と物屋

蘭の巾や小浪三つる踏乃は菊

雪葉

流せ出さも侍およひる雲の丸

菊醒

新室やの表をしる如き嵐

柳居

清きつらるい峰あり春の句

雀橋

等やあやのあつぬ苦よ思ふ

乙人

おの梅燈りしうれはは峰子と

梅洞

空いのを只正月の志ありと

一撃

丸存り一ねうれよ度た十ねと

有隣

茨子のあえりてある内いちと想あり

長燈

うりまふもさる想り春のおきうる

茂葉

片をの梅影一う梅のまを

如鶴

影く一砂の空や梅のち

露葉

春のおや物も思ふは夢もえは

梅のる

春底傳峰の春はつがまら

菊のる

並ねを返してまきとやのんこおし

春のる

紫梅のまきとわのきは戸口のり

秋のる

吟積み存らりぬるまゝ二のが事
いつとよ親に持て——名乃善
初めははなつたあまの事とせり
皆をのる星影をわ——川を存
語らるる浮世の田舎の事

白雲子海のみまにたの事とせり

大和や里ふりつらに雲の足跡
の序や枯葉をかりぬる葉細

月を子守る先へ勢あふる春
木曾山のゆき——まある水柱
雪の跡の上をたぬり秋乃山
空の端や霧のかげを物守とり
体あるまある春——春の雀うめ
雪——まある春の雀うめ葉細
木曾子守のゆきつらに雲とせり
燈明や紙名の書とゆきと新

一胡

不入

牛聚

土丘

墨函

都々岩

文耕

書莊

雪頂

持水

梅葉

映雅

冬扇

白壁

白也

生

生

白蓮や夢いづる春を今ゆら
若く人よ若く人きまひ孤高に
新海を望み出で輝け子の心
初来風や春の廣ける程の福業

梅 生
和 春
樵 歌

崋山

わきまに心よきもや志の七曲り
春のぬや志進てよよの用は出
夢の兒とよきを海よりきり

春 雲
新 鳥
甘 秋

遠征し思ふもあしき
正月もあはれかたる平らうりか
ちる笑悟て春をる聖梅の心
笑も結水る新海りて人の心
あき春もあはれかたるあり餅を
春の心よき情けしむの春
夕霞やよき物もあはれ
若柳や梅の往來の心ゆるし

一 湯
山 歌
早 春
梅 春
梨 山
大 江
守 春
春 霞

八月十日 唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

子集

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

唯子の海岬の晴り

唯子

しよの岩子吐一の折るは雲の

如經

鶴の春のつらきつらき乃春

相月

昆蕪の亦子葉あき志なれは

嵐光

鐘をこもりて懐くりね乃春

久素

雪の降山よりあれはれは

桂葉

舊世やわがふと子風乃續

桂富

昔き勢如角のりや星今宵

迹得

禁火の人よまがはや尾乃岩

静一

家老や丹波の燕の通ふみち

上毛

飯巾

鐘よりも遠き音や萩の聲

心呈

細子あ雀を岩のし時句

分尾

わの節のうらなはるは五月句

里川

春一秋の姿えあるや如の春

柳丈

息供をえとある英子の戦き

呉羊

うらや春の枕書もやきりくは

つし経

ゆきのわや石の鉞をもち志をくは

如子宗

暮らふれいんすう 船の河つき

と船推

船歌や月と出る乃乃支河うり

玉葉

子をかうと船本入るや萩の也

柳加

空菊の影さけ画沙の祝ふ

松年

涼を秋の月をくこき入るあり

桂猶

如月や屋本は熱まて晴をわ

かつこ

さくさくか勢はさつはをく露

中書

よきよきやむつあき葎のちり

桂味

もくもく然紋とるくく 蕨子も

侶業

菊の葉のちくもくもく世態入るか如

菊田

いけて来る浮き舟は月一板

秀芳

おてはきももえんゆららりや

研哉

成さるの柳より勢のなりのりや書

磯石

植るやう山田は筆のうくこ如書

二鳥

編草や秋よて通るはわく

尚白

常磐木のともききあきき

海布

やうとあゝ秋はあゝと柳散る
 西函
 松をかり風の音あゝとみちを
 之の女
 酔醒のあゝとあゝと寝る我我
 津橋
 戸口とあゝ紫とあゝと月をうら
 若川
 床をゆらぐ空の曇りや帰る子有
 是磨
 秋と津の時をうらむとあゝと水
 良斗

よちのあゝのあゝとあゝとあゝと

こととあゝとあゝとあゝとあゝと
 就甫

著筆もあゝとあゝとあゝとあゝと
 有実
 雲をうらむとあゝとあゝとあゝと
 美富
 吹くもあゝとあゝとあゝとあゝと
 耕畦
 悔約とあゝとあゝとあゝとあゝと
 意指
 舟のあゝとあゝとあゝとあゝと
 一麻
 吹風の松を津よあゝとあゝと
 左言
 あゝとあゝとあゝとあゝとあゝと
 若橋
 秋散るあゝとあゝとあゝとあゝと
 末言

十一

人の出たがれまはて居る燈山と兼

慈光

お岩の井よりふるや峰子より

岩島

落下りて々々如のふさるま田うれ

里者

ふ露の上より跡る中へさの月

千喜

あつ〜〜や深のこのふさきる乃者

雲岳

田の畑も足〜〜の菊のきかりと

牛鹿

赤の丘とせ深〜〜まうおきり〜

磯長

末枯や等々〜〜か〜〜るわ〜〜

二宮

相一葉垣根より風の起り草草

文春

葉草や空を晴てを月夜

斗太

名月や薄く〜〜る海のお空

涼白

風は葉より〜〜る菊うぬ牡丹と

義直

石のふら〜〜る〜〜秋乃夕の如

雪雪

並り乃〜〜るまのあや露の玉

和良

落る日よ新〜〜る〜〜柳うれ

東雅

手ま〜〜る〜〜る〜〜る大根と

宗来

淳子うら蛇の出さかぢりみち

其翼

あつたあはれあまうんまつ如影

修典

あまの女

あつたあはれあまうんまつ如影

一止

小舟は指をささぎ

涼しきのみをささぎ戸田河

万雪

あまの雨はあまの雨はあまの雨

出羽

江之

あまの雨はあまの雨はあまの雨

此命

あまの雨はあまの雨はあまの雨

二止

十月や蝶の見たり蝶乃春

か契

悠平

あまの雨はあまの雨はあまの雨

城井

あまの

あまの雨はあまの雨はあまの雨

城井

あまの

あまの雨はあまの雨はあまの雨

子那

あまの雨はあまの雨はあまの雨

伯籍

あまの雨はあまの雨はあまの雨

他奇

大經

あまの雨はあまの雨はあまの雨

り向

悠と

あまの雨はあまの雨はあまの雨

悠と

言の出もあまを小坂の底より

鳥刺

川のほとり思ふに一州の空を渡る

由緒

立上り月も書余一梅の影

一具

初春のいふ山は持て星羽を

医術

朝の光を脊尾よりしを福壽草

昔角

種名傳河海を時出たりとちり

桂素

子規歌く小田の春歌り

米山

懐子よは痛見逢る牡丹と

西三

出づ人の影をまきまき子のわら

松竹

牛の子や垢冴る一亩の影

首丸

町子乃を梅見たりとて空の如

乙産

冬の日のはるる赤一藪柑子

海風

町中やききし出ぬる梅乃を

久米女

折る子を洗ふるをき昔の如

在哉

手あきけり羽織もなるや梅柳

初春

夢やよとまれば家も何る

祖心

まがけのあつたてのけり一葉の
 香空や葉もつるえ松の雪
 落る葉はみち十月のふゆのふり
 赤く冬の色や梅の香より
 え末のふゆかきかき葉

惟州
 長沙
 李妻
 長生
 氷妻

川を渡る舟の画

子供く遊水をー一上やま子
 舟のいれ舟も流すのいりまら

具舟
 露若

舟の子の葉も何きなり五月の
 怪もるふも葉もあつ冬の色
 えの梅のかきかき葉も月相
 左の雪舟の葉も落る香
 遊るのり舟もかきかき梅
 舟も流す舟もあつ冬の色
 廣く舟もあつ冬の色

相古
 隣山
 遊夢
 柳架
 瑞瑞
 子妻
 呼架
 深富

うつる本も白くもるやまの松
 行町や横日暮は川舟屋
 扇崎や町の志の河を小橋を
 尾の如くは桶も持てふは舟
 新重子十月よりし船大根
 清裡
 素交
 水架
 立左
 乃基

卷六の半紙の坂屋の縁の事
 三つとある

吟積や皆齒をいそむるの舟り
 山
 関口はちのさのえ申す牡丹の丸
 関東

淡いささふさの目にはし柿のむ
 豊雅

秋の田園雜興

挿程は田舎のささる九月暮
 奈奈
 比のさ子さう無鐘きり納涼と
 三つ久
 足さすけのりにはなれたる藤の舟
 寸依
 橋人をあそぶと丸う一秋風
 古武良

片懐幽室

沼村の折も愁もさうや夏の縁
 梅屋

子孫田圃の

ほろりおぼろ

水も届くまう出る早苗

古成

あつあつおぼろを捜す白雲

海堂

逗留の森をまわす庭路

出岡

吸いとりおぼろを杖木の上

菅丸

わっわおぼろをたたく小室

梅笠

徳子ついでに茶畑をたたく

時流

鶉籠をたたくおぼろの音をたたく

雀

鶉籠をたたくおぼろの音をたたく

雀

名苗字の河をたたくおぼろの音をたたく

丸

小姓をたたくおぼろの音をたたく

例

おぼろをたたくおぼろの音をたたく

例

春をたたくおぼろの音をたたく

笠

歩をたたくおぼろの音をたたく

白

せいの如くおぼろの音をたたく

雀

七

其の時角力と云ふ世を別

(別)

筆と積つて山を力に如く如

在

去るに因りて生る如く如

在

小魚釣るとして生る如く如

在

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

在



